

『菅家後集』と『白氏文集』と

谷 口 孝 介

はじめに

『菅家後集』冒頭近くには、「自詠 476」、「読楽天北窓三友詩 477」、「不出門 478」、「叙意二百韻 484」など、いっけんして『白氏文集』の作を踏まえて作られたことが明白な詩題をもつ歌詩作品が見られる。いうまでもなく道真はそれまでにも『白氏文集』に拠って多くの作品を作ってきた。金子彦二郎氏によるとまったく同じ詩題をもつものに限っても生涯にわたって十八首にのぼる^①。しかしながらいま挙げた『後集』の諸作と、それ以前に作られた白詩と同題の諸作とは明らかに差があるものと考えられる。白詩を句題とした作を除いたそれまでの諸作は、詩材のうえで偶然同じ詩題となったものか、あるいは白詩の詩題に発想は得るものの白詩そのものに著しく即した詠作ではないのである。

それに対して『後集』の諸作は、明らかに白詩のある特定の歌詩作品を念頭に置いて、それについての詠作となっている。そのうえこれらの作が大宰府謫居のごく初期に集中して詠作されている点も注意を要する。つまり道真は大宰府謫居の初期において意識的に白詩を踏まえて、白詩を詠作対象とする歌詩作品を製作していたことが知られるのである。

しかも道真が拠った白詩は白居易の生涯にわたって、时期的にもまた内容的形式的にもまったく異なった種類の歌詩作品なのである。つまり道真は大宰府謫居の初期において『白氏文集』の総体を改めてとらえかえし、それらの歌詩作品との距離を測定するなかで謫居における自己存立の拠り所を索求しようとしたのではないだろうか。本稿ではその点に注目して白詩によって拓かれ、白詩を相対化することで生成した『後集』の文学世界の意味を考察する。

一、「北窓三友詩」との別れ

延喜三(九〇三)年二月、道真は死に臨んで大宰府での詠作をまとめて都に在る詩友紀長谷雄に送付した。このいわゆる「西府新詩一卷」(北野天神御伝)が現伝の「原型本系」『菅家後集』の祖となったものである。原型本の巻頭作が「自詠 476」であり、ついで「読楽天北窓三友詩 477」が置かれている。大宰府謫居詩の二作目にあたる本作は、白居易「北窓三友 62, 296」詩を享受してなつた詩であることを、道真自身が詩題において明言している珍しい作品である。ただこの作品においては白詩に共感を示すよりは、その境地との乖離を主題としている点に注目すべきである。

白居易「北窓三友」は現伝の那波本『白氏文集』では卷六十二に収載されているが、道真が「読楽天北窓三友詩」の冒頭で、「白氏洛中集十卷、中有「北窓三友詩」というように、元来は唐開成五(八四〇)年十一月に白居易みずから十卷に編定した『洛中集』に収められていたものである。ことは白居易の自記になる「香山寺白氏洛中集記 71-3608」に見え、そこには「白氏洛中集者、楽天在洛所著書也。大和三年春、楽天始以太子賓客分司東都、及茲十有二年矣。其間賦格律詩凡八百首、合為二十卷、今納于龍門香山寺經藏堂」とあり、大和三(八二九)年、五十八歳のうちに

太子賓客分司に任じられ東都洛陽に住していた十二年間に製作された約八百首の歌詩作品を十卷に編定して、香山寺に納められた集であつたことが分かる。

この『白氏洛中集』の性格は、白居易自身、別に「洛下遊賞宴集」(『白氏集後記 71-3673』)と呼ぶように、洛陽での「凡観寺丘野有「泉石花竹」者、靡_レ不_レ遊。人家有「美酒鳴琴」者、靡_レ不_レ過。有「凶書歌舞」者、靡_レ不_レ観」(「醉吟先生伝 61-2963」)という生活のなかで作られた歌詩作品を集めたものである。「北窓三友」はまさにそのような集の性格を體現した作であるといえる。

「北窓三友」は大和八(八三四)年、六十三歳のおりの作であり、五言古詩、韻は上平声四支韻、五微韻を古詩通押の範圍で押す。三十四句からなり、内容のうえからは六句ごとで一段を構成する。第一段は北向きの窓のあたりで琴・酒・詩の三友に親しむことをまずいう。第二段では、やむことのない三友それぞれの効能を説く。第三段では、三友を嗜んだ古人として、詩は陶淵明、琴は榮啓期、酒は劉伶を挙げ、「三人皆我が師なり」という。次の第四段は三師の「高風」を詠う箇所、彼らがひたすら三友に没入して「道を楽しみて帰するところを知る」さまであつたとする。第五段はひるがえって、三友と一日として離れることをえない自己の日常を詠う。終段のみは四句からなり、韜晦を含みつつ「親知」に理解を求めて

詠い収める。

なお終結部の八句には押韻上の工夫が見られる。それまでまったく押韻してこなかった奇数句に、二十七句目「扈」、三十一句目「詞」と韻字を置いているのである。しかも二十九句目末の「紙」、三十三句目末の「是」はいずれも上声四紙韻で声調は異なるが、同じ母韻をもつ語である。おそらくこれは第五段までは六句で一段を形成していたのに対して、終段のみを四句一段で詠い収めることとするための、形式上からの支えの意味があったものと考えられる。

白居易がこの詩の詠作の場とした「北窓」は、ことにこの時期の洛陽分司時代の作品に詠み込まれることの多い空間である。同年の作としては「詠所楽 63.2980」にも「帰来北窓下、解巾脱塵衣」とあり、翌大和九（八三五）年の作である「早熱二首・其一 63.3025」では「安知北窓叟、偃臥風颯至」と、自らを「北窓叟」とも呼ぶ。由来この語は東晉陶淵明「与子儼等疏」に「常言五六月中、北窓下臥、遇涼風暫至、自謂是羲皇上人」と見えるのに拠っており、隠居もしくは閑居の生活を象徴的にいっさいの詩語となったものである。妹尾達彦氏は洛陽転居当時の白居易の生き方について次のように述べる。

政治の中心・長安から、閑職者の街・洛陽への白居易の転任は、政治の第一線から敢えて身を引くことで、激化する長安の政争

から逃れ、その代わりに、次善の方法として、洛陽の美しい風景の中で、従来の交友関係を維持する生き方を選択した結果である。^④

「北窓」とは、このような当時の白居易の生き方を、空間のうえで象徴的に表出する語といえる。「北窓三友」詩はこの生活環境のなかで詠作された、自足の境地を十全に言い表した作品なのである。いっぽう道真の「読楽天北窓三友詩」は、脚韻こそ白詩を襲って、上平声四支韻と上平声五微韻との古詩通押の範囲で押すが、白詩の五言三十四句をはるかに凌ぐ七言五十六句からなる長大な規模の古詩となっている。白居易「北窓三友」に対して道真「読楽天北窓三友詩」の対照的な特徴として挙げられるのは何よりもまず、五言から七言への言語形式の変更である。総じて道真の歌詩作品においては、五言詩よりも七言詩が優勢であることはすでに指摘した。^⑤いまのばあいもその一般的な傾向性に沿ったものではあるが、明白に五言の「北窓三友」詩を指示しつつも七言であえて自作を製作したことには、やはりなんらかの意図が存したと考えざるをえない。その背景にある事実として考えることは、「北窓三友」詩が収められている『白氏後集』における、五言古詩に対する七言古詩の相対的な増加現象が挙げられる。白居易は『後集』において、前集である『白氏長慶集』での五言古詩を意味する「古体」詩に対して、

七言古詩をも含み込んでその総体を新たに「格詩」と呼称した（後序 51-2193）。その意味を花房英樹氏は「格詩が新しく採上げられたことは、七言でもつて古体が制作されたことを示すのであり、文学への態度が推移したことを語っている」と、この時期の白居易の文学態度の現れととらえる。

七言古詩の言語形式をもつ格詩の特徴を一言でいうならば感情の起伏の表出であろう。下定雅弘氏は七古の格詩に見られる特質を次のように述べる。

現在の自己を一生の時の流れの中に置いての、あるいはより大きな歴史の流れの中においての、自己の身世に対する深い詠嘆の感情が、『後集』以降の多くの七古を生んでいる。それは単なる悲哀でもないし、無論単なる歓楽の情でもない。長安での要路の人生をふりきって洛陽閑居の暮らしを積み重ねて行く、その自己の人生を思つて生じるある深い感慨である。⁷⁾

こうした複雑な心理葛藤を、高揚する感情表現に適した七言によって詠じたのが、『白氏後集』における七言古詩であったのである。道真是、五古の「北窓三友」を読んで触発された自己の感慨を言い表すのにふさわしい七古の形式をもって、この作品を製作したものと考えられる。

詩題の「詠楽天北窓三友詩」に見える「詠何何詩」の形式は、

白居易を始めとして中唐以降の詩題に数例見出すことができるが、それらの歌詩作品には道真の本作に見られるような長大な作で、感情の起伏を詠うものは少ない。その多くは白居易「詠謝靈運詩」²⁸⁴⁾の「謝公才廓落、与世不相遇。壮志鬱不用、須有所以洩」のように、その詩境に共感を示して、自己の現在の立場との類同性を詠うものである。中唐韓愈「詠皇甫湜公安園池詩」書²⁸⁵⁾其後二首の五言古詩二首は、やや他と異なり皇甫湜詩に触発されて君子の孤高の精神を詠った作ではある。しかし皇甫湜の原詩が残らないので分明でないところはあるが、これとても原詩を離れて詠じられたものではない。このようななかで原詩に対して「古今不同、今今異古」と違いを明言する道真の「詠楽天北窓三友詩」は、やはり特異な作品と言わざるをえない。

ちなみに本詩の詩題を「増補本」の影響を受けた前田家乙本以外の「原型本」は「詠楽天北窓三友詩」と作っている。他人の詩について「詠」字を用いると、その詩を吟詠する意となる。その数少ない唐詩の例としては、中唐權德輿「秋疾初愈、月夜詠、左思招隱詩、因而成詠」や同じく中唐元稹「見人詠、韓舍人新律詩、因有戲贈」²⁸⁶⁾を認めうる。これらはいずれも、前者に「閑吟理輕歩、不厭涼夜詠」とあり、後者にも「喜聞韓古調、兼愛近新詩。玉磬声声徹、金鈴箇箇圓」とあるように、詩を吟詠し、その音声の

側面に焦点を当てたものであることが分かる。とすると、道真がこの詩のなかで「只嫌吟詠涉歌唱、不_レ発_二于声_一以心思」ということと抵触することとなり、この詩のばあいは「詠何何詩」と題するのはふさわしくない。ここはやはり貞享四年版本を始めとする「増補本」に拠って「説」とすべき箇所である。そうすることによって、「読何何詩」の形式を踏まえつつもその伝統から逸脱せざるをえない、大宰府における道真の詩境が理解できるのである。

この詩は内容のうえから、四句ずつで小さな一節を形成し、その三節つまり十二句で大きな一段を形成するように作られている。ただ終結部のみは「北窓三友」のばあいを倣ったものか、四句の小節二節によって結ばれている。つまり詩全体では、十二句からなる大段四段と終結部の四句からなる小節二節とで構成されている。

詩はまず第一段落において、白居易「北窓三友」詩を持ち出して、その三友のうち酒と琴とは自分にとっては縁がなかったことをいう。段落末尾の二句、「雖_レ然二者交情淺、好去我今苦拜辭」はこの段落の主旨であり、おのずと三友の残りの一友たる詩を浮かび上げさせることとなる。

第二段落では前段を受けて冒頭で、「詩友」のみが終生変わらないう「死友」であることをいう。しかしその詩は道真にとっては「父祖子孫久要期」であって、けっして「北窓三友」に「絃歌復觴詠」

とあったような「楽道」とは意識されない。ここでいう「久要」とは、「論語」(憲問)に「成人」(徳の完成者)たりうる資格として言われる「久要不_レ忘_二平生之言_一」に拠る語で、孔安国は「久要、旧約也」と注する。つまり菅家にとつての詩とは、儒教的徳を具現化する方途であったという。「只嫌吟詠涉歌唱」というゆえんである。いま「忌避」のある身の上であって、「三間白茅茨」の「官舎」の「北窓」で、「穩」やかに「良友」たる詩が自身に寄り添ってくれることのみが、慰めであることをいう。

第三段落は一転して、「焼香散華」「念仏読経」のうちに「感応」して集まる「紫燕之雛黄雀兒」に焦点を当てる。その燕雀のありさまを「喃喃噴噴如_レ合_レ語、一虫一粒不_レ致_レ飢」と描出する。「喃喃噴噴」は燕雀などの鳴き声の擬音語であるが、それぞれ白居易にその使用例を見る。「燕詩示_二劉叟_一」に「喃喃教_二言語_一、一一刷_二毛衣_一」とあり、また「官舎」に「噴噴護_二兒鵲_一、啞啞母子鳥。豈唯云_二鳥爾_一、吾亦引_二吾雛_一」と見える。白詩においてはこの擬音語に導かれて鳥を詠うさいに、鳥の親子の睦まじさということに注目したい。道真は燕雀の「喃喃噴噴」という鳴き声に喚起されて、「彼是微禽我儒者、而我_不如_二彼多_レ慈_一」と、親の子に対する「慈」に思いついた。いまさらながら子に対する慈しみの情を思わざるをえない苦渋は、白居易「弄_二龜_一・羅」に「物情

小可_レ念、人意老多_レ慈」に見る「憂悩」と近いが、ことさらに「儒者」を揚言しているぶん、よりいっそう自身の不徳に対する悔悟が強調されるのである。

前段を受けて第四段落では、その親子がいつときに散り散りとなる惨状を述べる。この段落の第一節では四人の子息をひとりひとり点呼するかのよう_ニに列挙する。長男「尚書右丞」右少弁高視、二男「吏部郎中」式部丞景行、三男「侍中」藏人兼茂、四男「秀才」文章得業生淳茂と、それぞれ左降以前の官職唐名で莊重に言挙げされており、そこには儒家の惣領としての自意識さえ認めうる。したがって次節冒頭の「自從勅使驅將去、父子一時五処離」は、事態の急転によって道真の儒者としての理想世界が瞬時に潰えたことを言い表す激越な表現である。「驅將去」の「將」は、「動詞のあとにつき、そえ字となり、動作の現実化を表わす。(中略)將のあとに去・來がつく場合もある」という補助動詞である。盛唐劉長卿「送陸羽之茅山寄李延陵」に「鷄犬驅將去、煙霞擬_レ不還」とあり、白居易「新樂府・売炭翁」にも「一車炭重千余斤、宮使驅將惜不_レ得」と見え、いずれも蹴散らされるように瞬時にことが進行するさまをいう。謫所への道行きをいう「東行西行雲眇眇、二月三月日遲遲」の二句の惚けたようなどかさ、事態の急激な進行に追いつけない詩人の心象風景でもあろう。したがってこの段

落末尾の「單寢辛酸」はたんなる独り寝のつらさをいうのではなく、都における儒家の惣領としてのいっさいの人間関係をもぎ取られた懊悩なのである。

終結部はうえにも述べたように、四句からなる小節をふたつ連ねて全篇を結ぶ。まず初めの小節は謫所での生活の将来にわたる不安をいい、内容のうえからのとりあえずのまとめとする。最後の四句はひるがえって「北窓三友」との落差を明確に詠って収める。

古之三友一生楽 古の三友は一生の楽しみ、

今之三友一生悲 今の三友は一生の悲しみ。

古不同今異古 古は今と同じからず今は古と異なる、

一悲一樂志所之 一悲一樂志の之くところなり。

この第三句目は自明のことをことさらにいったようにも見えるが、詩歌の伝統においてこのように古今の差異を強調することはきわめて珍しい。たとえば宋謝靈運「七里瀨」(『文選』卷二十六)の結尾は「誰謂古今殊、異_レ世可_レ同_レ調」と結ばれており、時代は異なっても詩人の情は変わらないことを確認するものである。しかしこの道真のばあいは詩人の情は古今に孤絶しており、ただ志を言うという営為だけが共通するものとして意識されるのである。

二、一百韻形式の享受と意図

五言二百句から成る五言排律である「叙意一百韻 484」が、『菅家後集』のみならず、道真の全作品のなかでもっとも質量ともに充実したものであることは、衆目の一致するところである。この雄篇が、杜甫が創始し白居易と元稹とが文学形式として定着せしめた一百韻形式の五言排律を倣ったものであり、ことに白居易「東南行一百韻 16-908」とそれに和した元稹「酬_二樂天東南行詩_一 一百韻 287」とに多くの措辞を抛りながら製作されたことについては、すでに川口久雄氏による詳細な指摘が存する^⑩。

本節においては、道真の「叙意一百韻」が、一百韻形式をもって明白に白居易の文学形式を受容していることを示しつつも、内容においては本質的に異なる境地を詠出したものであることを述べて、前節において明らかになった白詩との距離をここにおいても測定しておきたいと考える。

一百韻形式による白居易の五言排律は次の三首である。①元和五(八一〇)年の「代_レ書詩一百韻、寄_レ微之_一 13-608」、②元和九(八一四)年の「渭村退居、寄_二礼部崔侍郎・翰林錢舍人_一詩一百韻 15-807」、③元和十二(八一七)年の「東南行一百韻、寄_二通州元九侍御・澧州李十一舍人・果州崔二十二使君・開州韋大員外・庾三

『菅家後集』と『白氏文集』と

十二補闕・杜十四拾遺・李二十助教員外・竇七校書 16-908」がそれである。同時期の元和五年の作で、元稹「夢遊春七十韻 1010」に和した「和_二夢遊春詩_一 一百韻 14-804」があり形式は似るが、これは清汪立名『白香山詩集』が感傷詩に部類するように五言古詩による作品である。③についてはそれぞれ寄贈された元稹に「酬_二翰林白学士代_レ書_一 一百韻 272」、「酬_二樂天東南行詩_一 一百韻 287」が残る。唐代の一百韻形式の五言排律はこれらを含めてもわずかに十首足らずを数えるのみなので、この元和年中の元白唱和詩群の一百韻五言排律が突出した存在であることが分かる。

しかもすでに川口氏も「(白居易の) こうした一百韻詩群の大作が、貶謫もしくは退居の失意のうちに連作されていることは注意すべく、(中略) 元稹の波瀾にみちた時期は正しく白居易の失意の時期と重なり、この両者がともに一百韻自照の長詩をよみかわしたところの東南行一百韻唱酬の二作は、両者のエネルギーが高まり交錯した接点に立つものといえよう^⑪」と指摘するように、これらの元白の作品が「貶謫もしくは退居の失意」にかかわるものであることが重要である。一百韻形式の創始作といわれる盛唐杜甫「秋日夔府詠懷、奉_レ寄_二鄭監・李賓客_一 一百韻」は、たしかに詩題に「詠懷」とあるように「自叙」に係る段落を含み持ち夔州における憂愁を訴えもするが、「それでもなお烈々たる壮心を失うことなき^⑫」詩人の状

態を詠ったものである。元白の長排はいうまでもなくこの杜甫の作品の方法を継承して成ったものであるが、同じく愛情ではあっても左遷をこれらの詩群の主題としたことが杜詩とは大きく異なる点である。したがって道真が「叙意」詩を一百韻形式によって製作した動機としては、一百韻詩という詩形式一般の性格に起因するというよりも、まさに白居易「東南行」が一百韻形式によって製作されていたからであると考えられる。つまりこの「叙意」詩の形式が一百韻であることによって、おのずと同形式の白居易「東南行」を踏まえて作っていることを読む者に理解させ、意識に上らせる仕掛けとなっているのである。

このように元白の一百韻詩をいっぽうに置いてこの「叙意一百韻」を読むことで、この作品の性格もより明確に理解できる。元白詩との差異はまず詩題からも明白である。杜詩も含めて元白の一百韻詩はいずれも贈答詩である点が注目される。これらの作品は自己に係る詠懐を故友に理解を求める意図で製作されているのである。いっぽう道真詩はこの長詩の結聯で「叙意千言裏、何人一可憐」と、千言に尽くした自己の意に共感してくれる人物がいないう孤絶感をいって詠い収める。そうすると唐詩には絶えて見ない「叙意」といういつけんそつけない詩題にも、どのようにいっても周囲の人間に理解されえない詩人の、万感の思いが託されているものと考えら

れる。

そのような「叙意一百韻」の、白詩を踏まえて想起させつつそれとの差異を示すことで、自己の立場を明らかにする方法がよく表れている箇所は、次のようなところである。

遇境虚生白 境に遇いて虚にして白を生ず、

遊談暗入玄 遊談して暗に玄に入る。

老君垂迹淡 老君迹を垂ること淡し、

莊叟処身偏 莊叟身を処くこと偏なり。

性莫乖常道 性は常道に乖くことなし、

宗当任自然 宗は当に自然に任すべし。

殷勤齊物論 殷勤す 齊物論、

洽恰寓言篇 洽恰なり 寓言篇。

右は、第九十五句から第二百一句に到る一段である。この前段では、大宰府の風俗の自己とは相容れないさまをいって、「与誰開口説、唯独曲肱眠」とひとり口を箝まざるをえない状況を詠んでおり、この段はそうした自己の鬱情を慰める手段として老荘が持ち出されてきたものである。白居易も「渭村退居、寄礼部崔侍郎・翰林钱舍人」詩「一百韻」[178]において、渭村退居の境遇における自己の身の処しかたをいうなかで、次のように老荘に言い及ぶ。

習隠將時背 隠に習いては時と背く、

干名与道妨 名を干めては道と妨ぐ。

外身宗老氏 身を外とするは老氏を宗とす、

齐物学蒙莊 物を齊しくするは蒙莊を学ぶ。

疏放遣千慮 疏放千慮を遣る、

愚蒙一方を守る。

樂天無怨歎 天を樂しんで怨歎するなし、

椅命不動勤 命に倚りて助勤せず。

憤懣胸須豁 憤懣胸須かくく豁にすべし、

交加臂莫攘 交加臂攘ぐるなし。

ことに「外_レ身宗老氏、齊_レ物学蒙莊」の二句は、道真がその措辞に拠ったことが明白である。しかし白居易においては文字通り老莊の処世を学んで、自身の偏頗な生きかたを徹底させる、そのかてとしてゐる。

それに対して道真のはあいは、まずこの一段の構成の面から見てもひじょうに整然とした詠みぶりである。つまり九十五句目の「虚生_レ白」は「莊子」(人間世篇)を踏まえ、九十六句目の「入_レ玄」は「老子」(第一章)に拠る。しかもこの対は白居易「奉_レ和_三李大_三夫題_二新詩_二首_一・其_一・忘_三筌亭_三 20-1284」に「空室閑生_レ白、高情澹入_レ玄」とあるのを学んだものでもある。ちなみに『文苑英華』卷三二六ではこの聯の「空室」を「虚室」に、「澹」を「淡」にそ

『菅家後集』と『白氏文集』と

れぞれ作っており、いつそう道真の詩句と似る。ついで九十七句目は老、九十八句目は莊と対句を構成する。さらに九十九句・百句の対句は、梁高允生「王子喬行」の「仙化非常道、其義出自然」と同じく、「常道」「自然」という「老子」の鍵語を用いて構成し、百一句・百二句の対句は「莊子」の二篇について、「殷勤」「洽恰」といづれも白居易が用いる俗語的な疊韻語をもって「莊子」に対する傾倒ぶり表す。

「殷勤」は古く宋謝莊「月賦」(『文選』卷十三)に「沈吟_レ齊章、殷勤_レ陳篇」と見え、五臣劉良注に「沈吟殷勤、習思之深也」というように、詩篇などを共感を込めて何度も繰り返し吟ずることをいう。白居易「晚秋、有_レ懷_二鄭中旧隱_一 14713」に「寥落_レ山夢、殷勤_レ採_レ蕨歌」と同様の用法を見る。ただ白居易は先の「渭村_レ退居、寄_二礼部崔侍郎・翰林_レ錢舍人_一詩一百韻」においても「殷勤_レ翰林主、珍重_レ礼閣郎」と用いており、ここは王鏊氏が「殷勤」与_レ珍重_二互文_一、_レ珍重_二為多謝・多承義_三と説明する感謝の意を表す俗語的用法である。道真は原義に拠りつつも白詩における俗語的用法をも学んで、「莊子」に対する衷心からなる共感の情を言い表そうとしたものと考えられる。対語の「洽恰」は珍しい語で、唐詩では白居易「吳_レ桜桃 542471」に「洽恰_レ拳_レ頭_レ千万顆、婆娑_レ面_レ面_レ三株」_一と見えるのがほとんど唯一の例である。蔣礼鴻氏は敦煌変文の用例

からこの語が唐代の俗語的豈韻語で、「多而密的意思」を持つと説明する。道真は『莊子』の寓言の言語的豊饒性をこの語で表して、上句の「殷勤」と対としたのではないだろうか。このようにこの一段はきわめて整然とした構成を持つことが分かる。

内容については老荘の偏頗な生きかたに「淡し」「偏なり」と共感を示すものの、それはあくまで「遊談」のよりの理知的な態度であって、その生きかたはどこまでも同一化しえない彼岸の存在としてある。この「遊談」とは梁劉孝綽「上虞鄉亭觀濤津渚」学潘安仁河陽原詩」に「遊談侍名理、擲管創文章」とあるように、清談や玄談と同じく老荘にかかわる自由な哲学的談論をいう。道真にはその具体的な現れとして、寛平二年の「逍遙遊詩」三首（『菅家文章』巻四 333-335）がすでにあった。^⑩つまり道真はここで老荘を、白居易のようにその偏頗な生きかたを自己のものとするようには享受せずに、思索のための動機となる書物として依拠しているのである。

このような対自的存在としての老荘を契機とした思索の果てに行き着くところは、やはり前節で見たのと同様、止むことなき詩心のうごめきである。それは波戸岡旭氏のいう、「自分の心の動揺を動揺のままに叙述する手法」^⑪によるものである。前段に続く第百三句からの十二句からなる一段は、大宰府における道真にとっての詩が

いかなる存在であるかを如実に語るものである。

景致幽於夢 景致 夢よりも幽なり、
風情癖未痊 風情 癖未だ痊えず。

文花何処落 文花 何れの処にか落つる、
感緒此間牽 感緒 この間に牽かる。

慰志憐馮衍 志を慰めて馮衍を憐れむ、
銷憂羨仲宣 憂を銷して仲宣を羨む。

詞拊触忌諱 詞は忌諱に触るるに拊む、
筆禿述麤癩 筆は麤癩を述ぶるに禿ぶ。

草得誰相視 草は誰にか相視すを得ん、
句無人共聯 句は人の共に聯ぬるなし。

思將臨紙写 思いては紙に臨んで写す、
詠取着燈燃 詠みては燈を著けて燃やす。

この一段についても白居易「東南行」の次の一段を対照して読むことで、道真の詩に対する姿勢はより鮮明になると考ええる。

去夏微之瘧 去夏微之瘧す、
今春席八殂 今春席八殂す。

天涯書達否 天涯より書達するや否や、
泉下哭知無 泉下にて哭知るや無や。

謾写詩盈卷 謾に写して詩卷に盈つ、

空盛酒満壺 空しく盛りて酒壺に満つ。

只添新悵望 只だ新悵望を添う、

豈復旧欲娛 豈に旧欲娛を復びせんや。

壮志因愁減 壮志愁に因りて減す、

衰容与病俱 衰容病と俱にす。

相逢応不識 相逢うも応に識らざるべし、

満領白髭鬚 領に満つる白髭鬚。

いま引いた箇所は「東南行二百韻」の結尾部である。引用箇所の上三聯の「謾写」「空盛」という行為に、このおりの白居易の虚無感が表示されている。この聯は前二聯を受けたもので、「天涯」、泉下」の聯下に「去年聞三元九瘴瘴、書去竟未報。今春聞席八没、久与往還、能無慟乎」と自注するように、白居易の虚無感の因由が隔絶した地にあつて故知との往還が絶えたことにあることが分かる。しかしそこには「新悵望」が加わったとしても友と時を共にした確たる「旧欲娛」の拠り所があり、「壮志」はすり減ったといえども言及されるのである。「衰容」のために識別が不可能だろうという結論に、いささか戯画化さえ感じさせられるのは、「相逢う」との可能性を信じて詠われているゆえと考えられる。

この白居易の姿勢に対して道真の詩についての感慨ははるかに絶望的である。それはたしかに金原理氏のように、「左遷という

限界状況に遭遇して、詩人としての自覚が明確に意識されていくなかで詠出されたものであ^⑮るには違いないが、そうした詩人としての自覚自体はすでに讃岐守時代の歌詩にじゅうぶんに看取しえたのであ^⑯つた。讃岐守時代の詩をめぐる状況との決定的な差異はなによりも徹底した孤絶感にある。そのことはいま掲げた白居易「東南行」との対照によっていっそう明らかとなる。故友との関係性なかで現在の状況認識を行う白居易詩に対して、道真のばあいは「草得誰相視、句無三人共聯」に見るように、詠詩はひたすらなる孤独の営為としてある。「共聯」とは、白居易「江楼夜吟三元九律詩」、因成三十韻 17-1009」に答えた、元稹「酬乐天江楼夜吟三韻詩」、因成三十韻 290」に「排韻曾遥答、分題幾共聯」とあるように、「二人が数物を次序によって詠じ」る「分題」において、ともに歌詩を作る「唱和集団の文学」の方法であつた。そうした「唱和集団」における文学形式を対岸に見据えて、道真はいま自己の置かれた孤絶した状況をあぶり出すのである。

そのような状況にあつても「風情の癖」は止まず、「感緒」は「此の間」に牽かれて自ずと湧き起こつてしまふ。「此間」は盛唐李白「上皇西巡南京歌十首・其二」に「草樹雲山如錦繡、秦川得及此間無」、中唐裴度「真慧寺」に「上界不知何処去、西天移向此間來」などとあるように、詩人の眼前にある詠詩の対象とな

る囁目の景をいう。しかしそうして詠出された歌詩も、「忌諱に触れる」ことを憚って口を「拊」まざるをえない状況であるからには、ひたすら「麤癩」粗野で物狂おしいことばだけを連ねるしかない。「詞拊触忌諱」とはいうまでもなく儒家の本分に悖る行為である。「三国志」（魏書・卷二十一・衛覲別伝）に「誰能犯顔色、触忌諱、建一言、開一說哉」と見えるのが、君側の士大夫の採るべき態度なのである。そうできない状況において、それでいてなお詩人の業として筆先を潰してまで詩を作ろうとしてしまふ、背反する心情を「麤癩」という語は十二分に表現する。価値の見出せないまったくの消閑としかいいようのない行為をせざるをえない苦衷が込められた語なのである。

この一段の結聯「思將臨紙写、詠取著燈燃」は、白居易の「謾写詩盈卷、空盛酒滿壺」に見られた虚無感を通り越して、極北の精神の存在様態をいうものと考える。この後句は明快ではないところが残るが、道真詩における燈火が詩人の孤心の喩となっていることを明らかにした山本登朗氏の卓説^④によれば、ここもやはり詠じえた詩人の思いが燃焼することをいつたものと考えられる。暗闇にぽつんと灯った火、しかもあたりはその光によってはけつして明るくはしえない漆黒の闇が広がるのみなのである。

おわりに

焼山廣志氏は大宰府謫居時代の道真の歌詩作品を詩風の変遷から三期に分けて概観する。その第一期は昌泰四（九〇一）年春から延喜元（九〇二）年秋、第二期は延喜元年初冬から延喜二年早春、第三期は延喜二年春から延喜二年冬までとする。本稿では、焼山氏が「痛々しいほどの心の葛藤が作品の根底に流れている」とする第一期のなかでも、ことに目を引く長大な規模の二篇の作品について論じた。それらは特定の白居易詩を取り上げて、それへの異議を申し立てるかのようにして詠じられていたのである。大宰府謫居のごく初期にこのような作品が集中して製作されたことは、そうすることによって自己の置かれた状況に応じた詩境を策定しようとしていたことを表すものと考えられる。

同時期にはなお本稿の冒頭でふれたように、「自詠 476」、「不出門 488」といった明らかに白居易詩を意識した、白詩に同題をもつ歌詩作品が存する。この二作についてはすでに菅野禮行氏、山本登朗氏、焼山廣志氏にそれぞれ専論が備わる。いずれの論もいうまでもなく白詩との距離の測定を示したものとなっている。なかでも私は菅野氏がこれらの道真詩には「白詩の表現や題材などに拠り沿いながら、その本質的な詩趣に乖離的傾向が見られたものがあ

る」²⁴)と指摘する点は重要であると考ええる。菅野氏は道真の生涯の全期にわたる作品を対象として論じており、結論も本稿の立場とは異なるものではあるが、白詩受容の様態の指摘はまさに氏のいう通りである。つまり大宰府謫居時代の道真は、自己の存立基盤を確定するために対自的存在としての『白氏文集』を必要としていたと考えられるのである。

注

- ① 金子彦二郎氏『平安時代文学と白氏文集―道真の文学研究篇第二冊―藝林舎、一九七八年、一〇二頁―一〇四頁。
- ② 谷口孝介「菅家後集の成立」『中古文学』三九、一九八七年。
- ③ 花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』朋友書店、一九七四年再版、三九頁。
- ④ 妹尾達彦氏「白居易と長安・洛陽」太田次男氏他編『白居易研究講座 一 白居易の文学と人生Ⅰ』勉誠出版、一九九三年。
- ⑤ 谷口孝介『菅家文章』の詩体と脚韻』『同志社国文学』三三、一九九〇年。
- ⑥ 花房英樹氏、前掲注③書、二〇頁。
- ⑦ 下定雅弘氏『白氏文集を読む』勉誠出版、一九九六年、四五―四頁。
- ⑧ 谷口孝介、前掲注②。
- ⑨ 小川環樹氏『中国詩人選集 別巻 唐詩概説』岩波書店、一九五八年、二二―四頁。
- ⑩ 川口久雄氏「菅原道真の文学と元稹・白居易の文学―大宰府における叙意―百韻をめぐって―」太宰府天満宮文化研究所編『菅原道真と太宰

府天満宮 上』吉川弘文館、一九七五年。

- ⑪ 同右。
- ⑫ 高木正二氏『杜甫』中央公論新社、一九六九年、一八〇頁。
- ⑬ 金子彦二郎氏、前掲注①書、二〇一頁。
- ⑭ 王鏡氏『詩詞曲語辞例釈(増訂本)』中国、中華書局、一九八六年、二八六頁。
- ⑮ 蔣礼鴻氏『敦煌变文字義通釈(増訂本)』中国、上海古籍出版社、一九八一年、二五〇頁。
- ⑯ 谷口孝介「菅原道真と『逍遙遊』」『日本語と日本文学』三九、二〇〇四年。
- ⑰ 波戸岡旭氏「菅原道真の『舒意一百韻』について」(『無窮会』東洋文化研究所紀要)一一、一九九一年。
- ⑱ 金原理氏『平安朝漢詩文の研究』九州大学出版会、一九八一年、二七―七頁。
- ⑲ 谷口孝介「詩人の感興―菅原道真『讃州客中之詩』啓進の意図―」『文藝言語研究 文藝篇』四六、二〇〇四年。
- ⑳ 花房英樹氏『白居易研究』世界思想社、一九七一年、二〇八頁。
- ㉑ 山本登朗氏「灯火と孤心―菅原道真の詩の世界―」『磔』一四〇、一九九八年。
- ㉒ 焼山廣志氏「菅家後集」編纂事情の一考察―巻尾の詩「謫居春雪」の解釈を通して―和漢比較文学会編『菅原道真論集』勉誠出版、二〇〇三年。
- ㉓ 菅野禮行氏『平安初期における日本漢詩の比較文学的研究』大修館書店、一九八八年。
- 山本登朗氏「謫居と閑居―大宰府の菅原道真―」『磔』一三〇、一九九七年。

『菅家後集』と『白氏文集』と

焼山廣志氏「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈(二)―」『国語国文学研究』三六、二〇〇一年、「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈(三)―」

『九州大谷情報文化』二九、二〇〇一年。

②④ 菅野禮行氏「菅原道真の白詩受容」『斯文』一一〇、二〇〇二年。

〔付記〕 本稿は、平成十六年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究C

「日本古典和歌における中国文学受容についての通時的研究」(研究代表者、芳賀紀雄筑波大学大学院教授)による研究成果の一部である。